

第二回 総合研究機構研究成果報告会

—早稲田学術の最先端を拓く—

*司会：

第二回総合研究機構研究成果報告会を始めさせていただきます。始めるに当たりまして、早稲田側から開会の辞、総合研究機構伊東孝之よりご挨拶いたします。

〔開会の辞〕

伊 東 孝 之

(総合研究機構長／政治経済学術院教授)

皆さん、こんにちは。私は総合研究機構の機構長を務めている伊東孝之と申します。私の所属は政経学術院です。

「総合研究機構」というのはあまり聞き慣れないのではないかと思います。実は私自身もこの9月21日に就任したばかりで、就任以前はよく知りませんでした。これに対してプロジェクト研究所というのは恐らくよく知られていると思います。総合研究機構は、プロジェクト研究所を束ねた組織、プロジェクト研究所を学内外において代表して、経理、人事、広報、調整などの事務サービスを提供する組織であります。

プロジェクト研究所というのは早稲田大学ではまったく新しい制度です。2000年4月に発足しましたのでまだ7年しか経っていません。現在137のプロジェクト研究所が活動中です。実は総合研究機構以外にもいろいろと研究機構がありまして、ナノ理工学研究機構、IT研究機構、先端科学健康医療融合研究機構、いわゆる科健機構ですね。それからアジア研究機構もございます。この5つの研究機構に所属しているプロジェクト研究所を合わせると、何と150以上もあるということになります。

プロジェクト研究所というのは早稲田大学の複数の専任研究員が中心となって、共同研究の課題と、それを達成するのに必要な研究期間等を設定して、外部資金を獲得しつつ、必要ならば国内外を問わずに学外の研究者をも組織して成立するような研究所であります。年間予算が1億円に達するような巨大なものもありますけれども、専任研究員の年間2万円の参加費だけで成り立っているような小さな研究所まで、さまざまな規模のものがあります。

その特徴を3つだけ指摘いたしますと、まず簡単に設立できることです。有志の先生がいて外部資金を獲得できれば簡単に設立できます。したがって、研究のその時々必要に柔軟に、機動的に対応できます。その代わり、発起人にかかる負担が非常に大きいということになります。多くのプロジェクト研究所はひとえにそうした先生方のエネルギーに支えられて存続しています。

2つ目は、一般社会に開かれているということです。「象牙の塔」という表現がありますけれども、プロジェクト研究所というのは「象牙の塔」という殻を打ち破った研究所です。外部資金を獲得しなければなりませんので一般社会との交流がきわめて盛んとなります。現在任用されている客員教員、客員研究員の数、教員が80名、研究員の方は700名に達しておりまして、これはほぼ早稲田大学全体の専任教員の

数に匹敵するものであります。その数はさらに増えつつあります。

3番目に、学際的かつ国際的だということです。研究テーマは実にさまざまで、人文科学、社会科学、理工学、生命科学など全ての分野にわたっております。1つの研究所が複数の領域をカバーしているということもしばしばです。例えばアミューズメント研究所とか、アジアIT戦略研究所とか、エルダリーヘルス研究所というのがありますけれども、これは当然一分野にはとどまらないような研究所です。また多くの研究所の研究員が国際的な構成となっております。国外の研究者が研究員に採用されたり、しばしば日本に招かれたりしております。

発足してからまだ日が浅いものですからいろいろなことを試行錯誤でやっております。研究成果報告会といいますのは、プロジェクト研究所の研究成果を外部に紹介しようとする試みでありまして、今回が2回目であります。

さまざまな分野にわたっておりますので、統一的なテーマを設定するのは大変難しいのですが、できる限り共通項を見出して、単一の研究報告会として意味のあるものにしようと努力してまいりました。昨年、第1回を開きましたが、「歴史と現代」、「生命と共生」、という2つのテーマを取り上げました。

ことは先ほど菅野先生から紹介がありましたように、「ロボット、医療福祉、倫理」というテーマを取り上げました。ロボット、医療福祉、倫理。これらは相互にまったく関係ないように見えますけれども、実は非常に深い関わりのある統一テーマであると考えています。テーマの関連性につきましては、きょうの司会をしていただく菅野先生の方から詳しく伺えることと思います。

今回のシンポジウム開催に当たりましては、WABOT-HOUSE研究所、ヒューマノイド研究所、生命医療・法と倫理研究所、未来医療政策研究所、ユビキタスヘルスリサーチ研究所という5つのプロジェクト研究所のご協力を賜りました。主催者として心から御礼申し上げます。

きょうの研究成果報告会を聴いていただいて、早稲田大学ではいかに興味深い研究が行われているかということをおわかりいただければ、主催者としては大変喜びとするところでございます。最後までここにお残りいただいて、この後にございますパネルディスカッションにも加わっていただければ幸いと存じます。(拍手)

***司会：**

それでは続きまして早稲田大学総長白井克彦よりご挨拶申し上げます。

〔 挨 拶 〕

白 井 克 彦

(早稲田大学総長／理工学術院教授)

皆様こんにちは。きょうは第二回の総合研究機構の研究成果報告会にご参加いただきましてありがとうございます。これから夕方、懇親会も含めると8時頃までと非常に長丁場ですが、「ロボット・医療福祉・倫理」というテーマで、一連のいろいろな発表、議論、ディスカッション等々が進められると思います。今紹介がありましたように、5つのプロジェクト研究所が当番で一緒になってきょうの会を組織しています。そのうちの1つで、ロボティクスは非常に伝統のある分野で、以前の機械工学科の加藤一郎先生を中心にしてロボティクスの研究が早稲田の中で始まり、今に至っているわけです。きょうはその一連の研究室のお弟子さんたちが登場するかと思います。それと、あと医療福祉ということで言えば、やはり仲間だった土屋先生、もう亡くなられてしまったんだが、人工心臓などを非常に早い時期から医学部と一緒に研究されていたグループがありました。そんな伝統があって、今はWABOT-HOUSE研究所と、ヒューマノイド研究所とが一緒になってさらに研究を伸ばしています。あと生命医療とか未来医療とか、そういうような問題では先般、2週間ぐらい前になりますけれども、東京女子医大と我々のジョイントのプロジェクトをいよいよ本格的に始めました。両学共通の建物を今建てつつありますけれども、2008年からオペレーションするということになっております。融合した大学院を作っていこうということで始まってきております。それもこのプロジェクト研究所等々でやってきた結果がそういうところに発展的に結びついてきているという意味で、このプロジェクト研究所の役割というのは非常に大きいと私は思っております。

また、ユビキタスヘルスリサーチ研究所は似ているところもありますし、法と倫理研究所について言えば、今、こういう分野の研究というのは非常に人間と接点を持っています。より深刻に我々科学者、技術者も含めて研究上の倫理、あるいは社会制度そのものを設計するときに、我々ももっと根本から考え直さないといけないような時代にまさにきているわけです。我々としては、幸い早稲田大学は総合大学で、社会科学系の、まさにそういうことを専門に取り扱って研究している研究者も多いわけです。そういう先生方が理工系の分野の先生と一緒にしながら、法と倫理の問題にも取り組んでおり、きょうはそれに関連した話がされるのではないかと思います。このプロジェクト研究所は、そういう総合性と我々の伝統、大学の特徴というようなことをそれぞれ伸ばしながらやってきている、その典型的な場所です。早稲田大学は何でも勝手なことをやるというそれぞれある一定のルールの中であれば自由に活動しようということ、いろんな先生方が集まっては研究したり、議論したりしながら、成果を出しています。きょうこうして第二回報告会を開催することができるということは、私も大変ありがたいし、うれしいことだと思っております。是非忌憚なくいろいろなご意見等をお互い戦わせ、有意義な会にいただければありがたいと思います。

一言だけご挨拶をいたしました。きょうの会の成功をお祈りしております。(拍手)